

開港の ひろば

YOKOHAMA
ARCHIVES
OF
HISTORY

Number

160

横浜開港資料館
発行日 / 2025(令和7)年9月13日



特集 横浜の外国商社と 舶来時計

小川雄一コレクション初公開 横浜の外国商社と舶来時計

2025(令和7)年9月13日(土)～12月21日(日)



【図1】 感謝状授与式(2025年3月14日)で並べられた小川雄一コレクション

はじめに

二〇二五(令和七)年二月、小川雄一氏が約四〇年かけて蒐集した商館時計一六三個をはじめとした関係資料二四五点が当館に寄贈された。この資料群は、これからの商館時計研究および横浜と、かつてあった外国人社会とのつながりを知る上で貴重な資料となることから、当館では「小川雄一コレクション」(以下、コレクションと表記)と名付けて、本展示が初公開となる【図1】。本書では展示の見どころを説明しつつ、明治の文明開化を代表する商館時計を広く多くの人に知ってもらえれば幸いである。

まず、展示の見どころとしては次の三点を挙げる。

- 一、商館時計一六三個と時計収納箱五一個の一挙展示
- 二、外国人居留地と外国商社―商館時計輸入の中心地横浜と外国商社―
- 三、外国人たちの横浜での暮らし―DKSHジャパン株式会社所蔵の写真アルバム・単体古写真の紹介―

そもそも商館時計とは何か。明治時代に横浜の外国商社が、日本に輸入した懐中時計や置時計を総称したものであり、当時は袂時計^{たもとどけい}と呼ばれていた。

なぜ、商館時計が明治の日本で広く普及したのか。それは明治維新が大き

く関係していた。文明開化を推し進めたい明治政府は、欧米の文化を取り入れ、近代化を目指した。政府は、暦や時間を西洋式に改める「改暦令」を実施した。改暦は、一八七二(明治五)年一月三日を一八七三(明治六)年一月一日とし、それまでの太陰暦が廃止し、太陽暦(グレゴリオ暦)を採用し、不定時法から定時法へと改められた。改暦以降は、人びとの間で洋式時計が普及していくが、まだ日本では時計を製造するだけの技術や人材がおらず、増加する需要に応えるために外国製を輸入するしかなかった。

当初、不定時法に慣れ親しんでいた人びとにとって、急な定時法への変更は大きな混乱を引き起こした。展示では横浜地域に及ぼした影響として久良岐郡生麦村(現・横浜市神奈川区生麦)の関口日記の記述と横浜の外国人居留地にいた外国人の書物から見ていく。さらに、福澤諭吉著『改暦弁』(一八七三年刊)による改暦についての解説書は、改暦の内容や導入の理由を人びとに説明した【図2】。また、改暦令が実施される前の一八六九(明治二)年には、柳河春三による『西洋時計便覧』といった洋式時計の解説書も刊行され、洋式時計の普及と使用方法への理解を深めようとした【図3】。こうした洋式時計をはじめとした欧米文化が入ってきたのが、開港地横浜であ

り、居留地の外国人や外国商社によってであった。

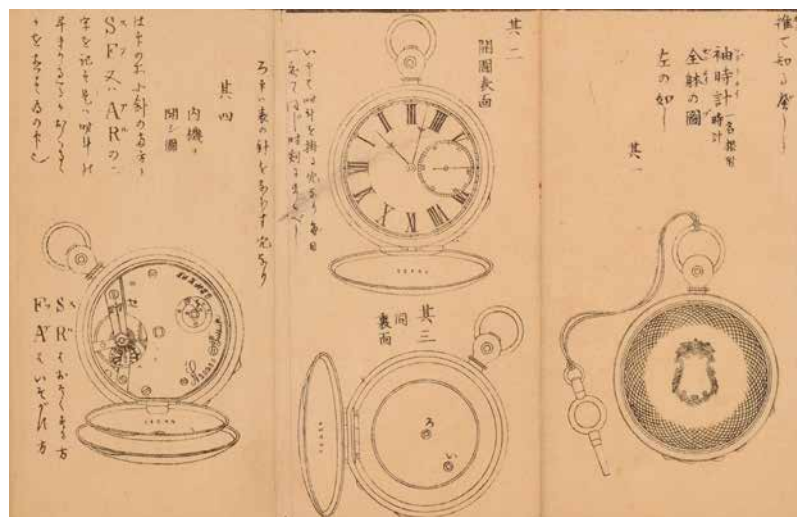
横浜外国人居留地と

外国商社

一八五九（安政六）年六月二日に横浜が開港する。現在の日本大通りから中村川にかけて外国人居留地が設けられ、後に山手にまで拡大した。一八九九（明治三二）年の居留地廃止まで、横浜の外国人居留地には日本最大の外国人社会が形成され、最盛期には約五、〇〇〇人の外国人が居住した。居留地には洋館が建ち並び、教会や学校も建設され、山手地区には居民の住宅や病院、学校、教会、墓地といった文教住エリア、山



【図2】 福澤諭吉著『改暦辨』の表紙



【図3】 袖(懐中)時計の全体図(『西洋時計便覧』より)

下地区は外国商社が建ち並ぶ経済エリアとして住み分けられた。

一八九〇年代に最盛期を迎えた横浜外国人居留地には約三八〇軒の個人宅、商社、学校、病院といった建物があった。一八九三（明

治二六）年刊行『横浜貿易捷徑』によれば、商館時計の輸入・販売した商社は一二軒であり、実際に時計の輸入・販売を行っていた外国商社は、江口茂氏の調査によれば、明治期を通じて約五〇軒を数える。コレクションの商館時計一六三個は、スイス・フランス・ドイツ・アメリカの商社一六社が輸入・販売した時計であった【表1】。とくに、横浜で時計輸入・販売で名の知れた商社であったスイス系商社のファブル・ブラント商会、J. コロン商会、E. ジャコット商会、シイベル・ブレンワルド商会、ドイツ系商社のFr. レッツ商

国籍	商社名	時計	収納箱
スイス系商社	ファブル・ブラント商会	24	5
	シイベル・ブレンワルド商会	6	4
	シイベル・ウォルフ商会	2	3
	シイベル、ヘグナー商会	1	
	ワーゲン兄弟商会	4	6
	F. ヘロブ商会	3	2
	R. シュミット商会	5	1
	J. コロン商会	20	5
	E. ジャコット商会	7	1
	H.C. モルフ商会	1	
フランス系商社	F. ペルゴー商会	1	
	オッペネメール兄弟商会	1	1
ドイツ系商社	フロスダー・バーク商会	10	3
	F. レッツ商会	28	6
	ウォルシュ商会	1	
	謙信洋行	1	
	A. エストマン商会	2	1
	C. イリス商会	6	2
	カール・ローデ商会	2	
アメリカ系商社	ブルウル兄弟商会	27	6
	J. ウィトコフスキー商会	5	2
その他	J. ウルマン商会	4	
	不明	4	3
計		165	51

時計は小川雄一コレクション163個＋小川雄一氏所蔵2個

【表1】 商館時計を取り扱った外国商社(小川雄一コレクション)

会、アメリカ系商社のブルウル兄弟商会は、コレクション内にも多く含まれており、広く流通していたことがわかる。展示では、コレクション内の一六社の外国商社を紹介している。また、一八九五（明治二七）年に製作された「横浜外国人居留地火災保険地図」を用いて、どこに外国商社があったのかを示し、かつての洋館が建ち並んでいた山手地区の当時の様相を、現在の姿と重ね合わせて思い浮かべて欲しいと思う。

商館時計

展示では港別に商館時計の輸入数を示している。明治期を通じて、約四五〇万个の商館時計（懐中時計）が日本に輸入された。これは、大蔵省作成の『大日本外国貿易年表』によるもので、一八八〇（明治一三）年～一九一二（明治四五・大正元）年までの時計輸入人数を見ると、横浜には三二二万個が輸入された。平均して七七パーセント、明治初期には、九七パーセントの数字が示すように、他の開港地神戸や長崎と比べると圧倒的であった。商館時計が普及した要因と言えるのが、前述の改暦もだが、戦争によるものがあつた。一八七七（明治一〇）年の西南戦争のとき、出征する兵士たちが横浜の外国商社で時計を購入した。日清戦争（一八九四～九五）後に、多くの時計が輸入されたことから、横浜の外国商社や日本人時計商は、大きな利益をあげることができた。小川雄一氏が商館時計の蒐集と研究を行うきっかけとなったのが、祖父小川芳五郎氏が日露戦争（一九〇四～〇五）に出征した際に持っていた商館時計（フランス系商社ラロスデバアク商会）であつたことから、懐中時計の普及に戦争の影響もあつた。小川氏には展覧会図録のプロローグに蒐集と研究を始めるきっかけとなった祖父の時計について執筆いただいたので、ご一読いただきたい。

日本に輸入された商館時計には、時代によって針や文字盤に流行があり、器械部分や裏面の魚子^{なまこ}などに日本独特の特徴がある。そして、裏蓋の商標（トレード・マーク）は外国商社ごとに、動物・植物・模様など多岐にわたり、商社の歴史を伝えるものにもなる。例えば、【図4】のトレード・マーク三点は同じ「軍人馬印」となる。しかし、取り扱った商会はそれぞれ、【図4・1】がワーゲン兄弟商会、【図4・2】F.ヘロブ商会、【図4・3】R.シュミット商会であつた。実は、三社が同じトレード・マークを使ったのには理由があり、時計はR.シュミット商会で製造されたものであつた。ワーゲン兄弟商会は当初、R.シュミット商会の日本における代理販売店であり、【図4・1】ワーゲン兄弟商会の軍人馬印は、馬に被せられているブラケットにワーゲン（Wagen）と兄弟（F.ries）のWとFが入っている。しかし、ワーゲン兄弟商会はR.シュミット商会とのトラブルにより代理販売店契約を解除され、さらに社員だったF.ヘロブが独立し、F.ヘロブ商会を開業した。そして、今度はF.ヘロブ商会がR.シュミット商会の代理契約店となり、トレード・マークも【図4・2】のように、F.ヘロブ商会のものにはFとCoが入っている。その後、R.シュミット商会



【図4・1】ワーゲン兄弟商会の軍人馬印



【図4・2】F.ヘロブ商会の軍人馬印



【図4・3】R.シュミット商会の売人馬印

が横浜に支店を構える。【図4・3】R.シュミット商会は、RとSの軍人馬印の商館時計を販売した。展示では時計を輸入・販売した外国商社の歴史を時計だけではなく商標やポスターからも知ってもらいたい【図5・6】。

このように改暦以降、商館時計は徐々に日本社会に浸透していった。それは、一八八六（明治一九）年～一八八七（明治二〇）年に神奈川県警察本署が作成した品触を見てもよくわかる【図7】。品触とは、紛失、あるいは盗難に遭った品が質屋や古物商に持ち込まれるケースがあり、持ち主からの届出を警察がまとめて、質屋や古物商に配布したものである【図8】。品触によると六三八個の時計が届けられ、そのうちスイス製時計は二二二個を数え、スイス製が広く普及していたことがわかる。当館では、これまでもスイスと横浜との関係について触れてきたが、商館時計輸入・販売していたスイス系商社が大きく影響を与えていたことを紹介する。

横浜とスイスのつながり

日本はスイスと、一八六四（文久三）年二月一九日に修好通商条約を締結し、両国の国交が開かれた。スイスは日本が八番目に結んだ国であるが、海に面していないスイスが遠く東アジアの日本と国交を結んだのには理由があつた。スイスは、プロイセンやフランスの保護関税政策により経済が停滞し、新たな販路を求めていた。日本の開国を知ると即座に調査団を派遣し、幕府と交渉するが、条約を結ぶことはできなかった。その後、改めてエメ・アンベール（Aime Humbert）を団長とした使節団を派遣し、幕府と条約を結ぶことに成功し、スイスは八番目の締結国となった。ちなみに、使節団に参加したメンバーは、六名中四名が条約締結後も日本に残り、横浜で商社を興した。その一人がジェーム



【図6】 R.シュミット商會のポスター



【図5】 シュオ・ブ・フレール商會のポスター

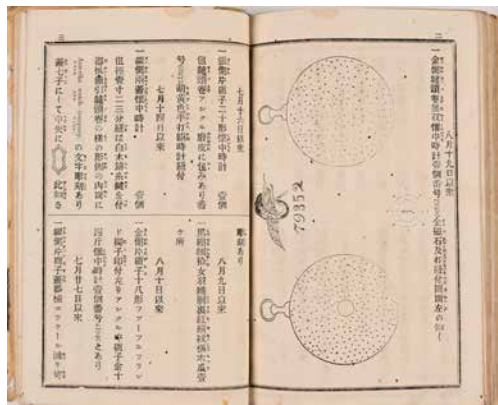
ス・ファブルブランド (James Favre-Brandt) であった【図9】。彼は時計の輸入販売以外にも日本人技術者をスイスに留学させるなど、日本の時計産業に大きな功績を遺した人物である。さ

らに、横浜で最初に時計商として活躍したフランソワ・ペルゴ (François Perregaux)。彼は時計輸入・販売の足掛かりを築き、パイオニアであった。彼ら二人は横浜で亡くなり、横浜外国人墓地に眠っている。他にもポール・コロン (Paul Colomb)、フリードリヒ・ウィルヘルム・レッツ (Friedrich Wilhelm Retz)、ジュリアス・ウイトコフスキー (Julius Witkowski) も横浜外国人墓地に眠っており、展示では、商館時計の輸入・販売に関わった人びとについても紹介している。

また、横浜のスイス系商社のなかでも、最古参のシイベル・ブレンワルド商會の後継であるDKSHジャパン株式会社所蔵、当館寄託の写真アルバムと単体古写真を紹介している。写真アルバムでは一八九〇年代から一九二〇年代後半に撮影された写真を、四つのテーマ「日本までの道のり」・「横浜での生活」・「射撃好きのスイス人」・「災害の記録」で紹介している。単体古写真は二〇一九 (令和元) 年に当館に寄託され、写真からは商社や個人宅など横浜での暮らしや当時の日本の風俗・景観を知ることができる。今後の居留地研究に大いに参考になる資料であり、本展示が初公開である。

おわりに

今回の展示は「小川雄一コレクション」の初公開であり、横浜ゆかりの商館時計の里帰りとも言える。当館ではこれまでの横浜外国人居留地の展示・研究において一定の成果を出しており、併せて商館時計研究も江口茂氏の業績として反映されている。今回の小川雄一コレクションはさらなる商館時計研究と外国人社会の実態究明を進めるうえで重要な資



【図8】 品触の中身



【図7】 品触 作成: 神奈川県警察本署



【図9】 ジェームス・ファブルブランド (『ガゼット50年史』)

料群となる。商館時計は明治の文明開化を代表する品の一つであるが、流通や販売などの実態はまだ不明な部分も多く、今後の研究課題である。

最後に、エピソード「外国商社と商館時計のその後」では、外国商社を介さず、日本時計商が直接輸入した時計や国産化が進むと商館時計は姿を消していく過程を紹介する。横浜の外国人居留地も一八九九年の居留地廃止や一九二三 (大正一二) 年九月一日の関東大震災により旧居留地は大きな被害を受け、外国商社が撤退した。現在の横浜にはかつての外国人社会の姿を伝えるものはわずかしが残っていない。

本展示では商館時計を通じて、横浜外国人居留地が、現在の国際貿易港都の原点として、かつての横浜外国人社会の様相を感じてもらえれば幸いです。

(白井 拓朗)

遣米答礼使とその資料

はじめに

一九三〇（昭和五）年、関東大震災からの帝都復興を記念し、時事新報社は女性を代表とする「遣米答礼使」の派遣を企画した。この使節団は、震災時に多大な援助を寄せたアメリカ市民に感謝の意を伝えるとともに、東京・横浜両市の復興状況を報告することを目的としていた。

使節団は、フーバー大統領や前大統領クリッジ、前駐日大使ウッズとの面会をはじめ、赤十字社、新聞社、放送局などを訪問し、感謝の意を表した。また、復興の様子を記録した写真帳などの記念品を贈呈し、日米間の理解と尊敬を深めることを目指した。



【図1】 赤十字社本社（ワシントン）での交流の様子

資料の概要

本稿では、横浜開港資料館が所蔵する遣米答礼使の関係資料をもとに、使節団の活動を振り返る。なお、本稿の掲載資料はすべて当館所蔵（中村房次郎関係文書）である。

答礼使の一人である中村桂子は、横浜の実業家中村房次郎の六女であった。当館が所蔵する中村房次郎関係文書には遣米答礼使の関係資料が含まれている。写真帳一冊とスクラップブック三冊の計四点である。中村房次郎は、明治後期から昭和戦前期にかけて横浜の政財界で活躍した人物であり、



【図2】 中村桂子の遣米答礼使選出を伝える新聞記事

これらの資料は中村家の親族である松崎氏より寄贈されたものである。

写真帳には出発前から帰国後までの使節団の行動が記録されており、視覚的にその様子を伝えている。スクラップブックには、電報や書簡のほか、『時事新報』やアメリカで発行された日本語新聞、外国語新聞の記事の切り抜きが含まれており、当時の状況を知る貴重な資料となっている。

遣米答礼使たち

答礼使の選考委員には、外務大臣・幣原喜重郎、復興局長官・中川望、東京市長・堀切善次郎、横浜市長・有吉忠一らが名を連ねた。幣原外務大臣は「優雅なる婦人使節が日米国交の上に愉快なる記憶を残すよう使命を全うせん事を祈る」と語っている。選ばれた女性には、皇室関係者に縁のある家や、軍人、実業家の家庭に育ち、いずれも高い教育を受けた四人（蘆野きみ、佐藤美子、徳田純子、松平佳子）であった。後に、横浜市から中村桂子加わり、五人となった。いずれも二〇歳代であった。【図2】は、桂子が答礼使に選ばれたことを伝える新聞記事の切り抜きである。

遣米答禮使出發式	
三月十四日午後一時半 於日比谷東京市公會堂	
▽次 第	
一、開 會 の 辭	時事新報編輯長 伊藤 正徳氏
一、計 畫 の 説 明	時事新報主筆 板倉 卓造氏
一、送衛委員長の挨拶	貴族院議長公府 徳川 家達氏
一、答禮使の挨拶	蘆野 きみ嬢 中村 桂子嬢 徳田 純子嬢 佐藤 美子嬢 松平 佳子嬢
一、花 束 贈 呈	海軍軍樂隊
一、來 賓 祝 辭	祝勝歌吹奏 内閣總理大臣 濱口 雄幸氏 外務大臣男爵 幣原 喜重郎氏 内務大臣 安達 謙藏氏 米國大使 W.R.キヤツスル氏 復興局長官 中川 望氏 東京市長 堀切 善次郎氏 横浜市長 有吉 忠一氏 新聞通信社代表 藥田 叙次郎氏 婦人團體代表 安井 哲子女史 海軍軍樂隊演奏
一、樂 曲	樂 (曲の附けとある時刻) 告別行進曲 海軍軍樂隊
一、開 會 の 辭	時事新報編輯長 伊藤 正徳氏
▽餘 興	
一、映 畫	以上

【図3】 遣米答禮使出發式次第

出発と市民の反応

使節団の出発式は、

一九三〇（昭和五）年三月一日に日比谷の東京市公会堂で開催された【図3】。貴族院議長・徳川家

達が挨拶を行ない、選考委員のほか、内閣総理大臣・浜口雄幸、内務大臣・安達謙藏、米国大使・キヤツスルらが来賓として出席した。答禮使が登壇し、それぞれ挨拶した。中村桂子は、横浜市民の奮闘とアメリカからの援助によつて、横浜が見違えるほど復興したことに触れ、「火焰に包まれ幾日も焼け続いた当時の模様、更に救恤品配給の光景などをよく話したい」と語った。

答禮使は市民の注目を集め、特に女学生の間で評判となった。中村家には激励と感謝の手紙が多数送られ、新聞紙



【図4】 横浜出港風景

面に紹介された。その中で紅蘭女学校の学生は、「安心して住める家や病院がアメリカの援助によつて提供されたと聞いた時、本当に涙して感謝した」と語り、「心と物資の両方からの復興ぶりと感謝を伝え、親善をはかつてほしい」と期待した。

アメリカにおける活動

答禮使は、ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、シアトル、ポートランドなどアメリカ各地を巡回した。訪問先では、各地の市民や在留日本人から歓迎を受けた。



【図5】 ロルフ市長(サンフランシスコ)と使節団

サンフランシスコにて

四月二日、使節団はサンフランシスコに到着。日本語新聞『日米』（四月二日付）は、「婦人使節は本日來桑す」と一面で報じ、英字新聞も写真付きで使節団を紹介した。地元的女性たちは茶会を開いて歓迎する予定とされ、使節団が米国社会に好印象を与えることが期待された。こうした反応から、答礼使の派遣は、在留日本人にとっても歓迎されることだったのだろう。

サンフランシスコ滞在中（四月二日から六日まで）、使節団は商業会議所や赤十字社などを訪問。ロルフ市長は、歓迎の意を込めて使節団に金色の鍵を贈呈した【図5】。また、ナショナル放送会社で初のラジオ出演を果たし、現地の

人々に直接メッセージを届けた。市内見学では、上陸後初めて洋服に着替えて、百貨店での買い物も楽しんだ。

ロサンゼルスにて

ロサンゼルス滞在（四月七日から一日まで）では、ポーター市長らと面会し、日米友好の促進に努めた。移動時は洋装が中心だったようだが、ロサンゼルスに向かう汽車の中では、激しい揺れにより和服に着替えるのに苦労したという記録もある（蘆野きみ記「答礼使の旅日記七」『時事新報』六月二三日付）。また、映画俳優ダグラス・フェアバンクスとメアリー・ピックフォード夫妻からの昼食の招待を受け、ユナイテッド・アーティスツのスタジオ内の住まいで、

楽しいひととき時を過ごした【図6】。メアリーから贈られた銀色の包みには、うす緑のびろろの小箱が入っており、中身は緑色のスイス製エナメルのきれいなコンパクトで、一同は大いに喜んだという。（蘆野きみ記「答礼使の旅日記八・九」『時事新報』六月二四・二五日付）

ワシントンにて

四月一五日、使節団はホワイトハウスを訪問し、フーバー大統領と面会した。この日は特別な意味を持つ訪問であり、使節団は華やかな振袖を着用して臨んだ。謁見はホワイトハウスの大統領の居室で行なわれ、使節団は日本国民を代表して感謝の意を表した。また、大使

館の午餐会では前大使ウッズに、赤十字社本部では社長ペイン氏に対しても謝意を伝え、答礼の目的を果たした【図1】。

その他の都市にて

ニューヨークでの慌ただしい日程を終えた四月二五日、使節の三人は、ノーサンプトンに向かい、前大統領のクーリッジ夫妻を訪ねた【図7】。

この訪問により、大統領、赤十字社長、前大統領等に感謝の意を伝え、使節団の重要な使命は果たされた。

シアトルでは、新聞社シアトル・ポスト・インテリジェンサー社を訪れた。中村桂子が、一九世紀後半に登場した印刷機「ライノタイプ」の操作を



【図6】 ダグラス（前列右・後列右）夫妻と使節団



【図7】 クーリッジ夫妻（中央）と使節団



【図8】 ライノタイプを操作する中村桂子
『シアトルポスト・インテリジェンサー』5月8日付一面

体験した【図8】。この印刷機は、新聞や書籍の大量印刷を可能にした画期的なものだという。文化交流の一環であった。

帰国と歓迎

答礼使一行は三月一八日に横浜を出港。アメリカ各地を巡り、五月三一日に帰国した【図9】。帰国後も東京や横浜で、歓迎の行事が続いた。

作家の三宅やす子は、答礼使の帰国を「近頃で快いこと」と評し、次のように述べている。「女性の身を以つて、七十五日の旅程と間断ない歓迎裡の応接と、それから故国に帰つて後



【図9】 帰国した答礼使

の、連日の日程を爽かに果たし終つた答礼使五嬢に敬意を表する。それは頑健な男子もなか／＼堪えられない体力を要することだ。良家に育つて、規律のいゝ生活をした若い女性でなくては務め切れない自身の煩勞である。五嬢の健康は、若い日本の女性の健全な発達を象徴して居ると思はれて、此事が特に愉快である」（婦人界時評「近事 雑感上 遣米答礼使」）。答礼使たちの



【図10】 賑わう記念品展覧会場

なかには、滞在中病気にかかったものもいたが、全員が無事に帰国し、その後の様々な行事を終えた。特に女性たちには、関心を持って迎えられたようである。

横浜にて

横浜でも、複数の歓迎行事が催された。いくつか紹介したい。

・中村桂子報告会（六月一〇日）

開港記念横浜会館で、有吉横浜市長主催の報告会が開かれた市長の挨拶に次いで横山事務長による詳細な報告の後、中村桂子が横浜の立場から答礼の使命遂行にあたった模様を、三〇分にわたり語った。女学生や婦人団体などを中心として、千五百人ほどが参加し、盛況を博した。会場では、答礼使の出發から帰国までの様子を収めた時事新報社の映画も上映された。

・記念品展覧会（六月一五日から二〇日まで）

相模屋呉服店で「遣米答礼使記念品展覧会」が開かれた。東京の高島屋での展示を横浜でも実施したものだった。サンフランシスコ、シカゴ、タコマなどから贈られた「鍵」は、「市寶」に対する最高の待遇を意味し、ボストン市三百年祭記念メダルやリンド

バーグの大西洋横断記念メダルなど、アメリカ官民からの感激を物語る品々が展示された【図10】。

・国際婦人親善会主催答礼使歓迎のお茶会（六月一七日）

ホテルニューグランドにて、答礼使五人と横山事務長などを主賓に迎えた歓迎会が開催された。会長モーコック夫人、山県県知事夫人、有吉市長夫人をはじめ、内外三〇〇人が出席した。答礼使三人による英語での挨拶の後、コンサートや米国児童によるダンスなどの余興が行なわれた。

おわりに

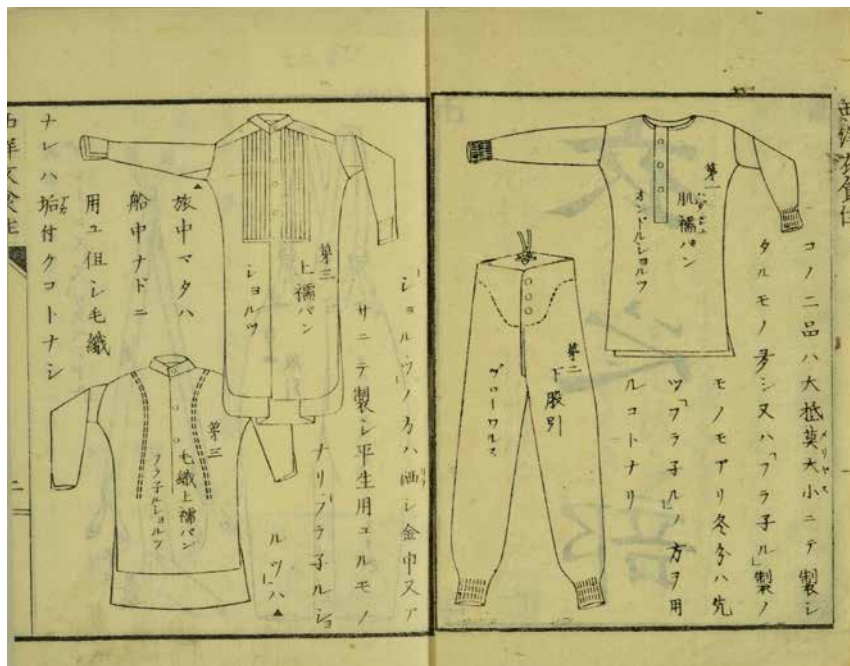
震災遣米答礼使は、幣原外務大臣が答礼使選考委員を務め、外務省が費用の一部を負担し、駐米大使がフーバー大統領との面会を取り計らうなど、政府主導の交流であった。新聞社主催の単なる民間交流ではなく、日本政府名代としての答礼という性格が強かった。アメリカ側も大統領だけでなく、各地の政財界代表者が交流行事に出席した。好印象を与えた遣米答礼使は、日米親善において一定の役割を果たしたと言える。

（上田 由美）

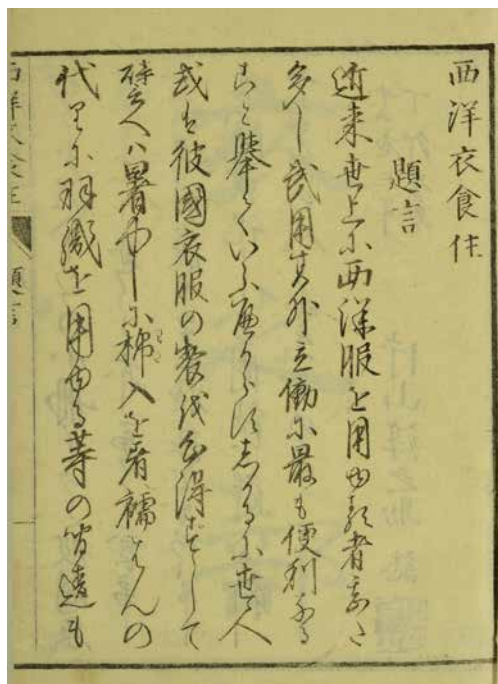
館蔵資料紹介 片山淳之助 『西洋衣食住』



当館は古写真・錦絵・絵葉書・古文書・洋典籍・海外資料（複製）など、多様な形態の資料を所蔵しているが、さほど注目されない資料の一群に「和装本」がある。和装本（和装本）とは和紙を使い和綴りで製本された書籍のことである。ここでは片山淳之助『西洋衣食住』（請求記号：和装88）を紹介したい。



【図1】 片山淳之助『西洋衣食住』慶応3年（1867）当館蔵 衣服について説明している部分。



【図2】 片山淳之助『西洋衣食住』題言

本書の著者は実際には片山ではなく福澤諭吉であると
いう（片山は福澤の門人）。当館所蔵本の法量（サイズ）はタテ一五四×ヨコ一〇八cm、本文一九丁の小型本である。題言の末尾に「慶応三年丁卯季

冬」とあり、慶応三（一八六七）年十二月に成立したことが知られる。内容は書名のとおり、西洋の衣服、食事の諸道具、家具・什器について、図をまじえて簡潔に説明したものである【図1】。

内容は現代の私たちにはむしろ周知のことが多いのだが、本の随所に垣間見える著者の時代認識や、日本人・外国人のイメージが興味深い。たとえば、題言の初っ端に「近來世上に西洋服を用ゆる者甚た多し、武用（軍事用）其外立働に最も便利なること挙ていふへからず」（近ごろ世の中に洋服を用いる者がとても多い。軍事用そのほか動きまわるのたいへん便利であることはあえて言うまでもない）との言がある【図2】。本書が書かれたのは江戸幕府が倒れた直後、戊辰戦争がはじまる直前という時期なのだが、洋服を着用する者が「甚た多し」

と著者には映っていた。日本人の洋装は明治初期の「文明開化」の時代にはじまった、というイメージがあるが、意外にもそれは明治に入る前からあらわれていたのである。

また、割羽織（フロックコート）、身分の高い人が着用）と丸羽織（現代のスーツに近く割羽織よりはカジュアル）について解説した箇所では、「外見ヲ飾ル仏蘭西人ナドハ割羽織ヲ着ル人多シ。亜米利加人・英吉利人等ハ、都テ江戸子ハダニテ衣服ニ構ハズ、襦パンサヘ清浄ナレハ、上着ハ何ニテモ頓着スルコトナク、高貴ノ人ニテモ丸羽織ヲ着ルモノ少カラズ」との評がある。おしゃれなフランス人を、衣服に頓着しないアメリカ人・イギリス人と対照しつつ、英米人を江戸っ子と重ねて視る部分など、欧米の生活文化を实地で識っていた（すでにこの時点で三度の海外渡航経験があった）福澤ならではの視点であろう。そして、現代につながる外国人（とくにフランス人）のイメージが、すでに本書では示されているのである。

書籍（和装本）には、あるテーマ・事柄を総合的にとらえる視点が必要とされるがゆえに、時代相やイメージが端的に表現されることがある。古文書等の一次資料とあわせて利用すると、ある時代の姿がよりくつきりと豊かに映し出されるように思う。

（古崎雅規）

安政6（1859）年6月2日の横浜開港にともない運上所、外国人居留地と合わせて日本人町が整備され、そこには多種多様な品物を取り扱う商人たちが各地から集い、諸外国との貿易に従事しました。

今回は幕末期に横浜で活躍した商人の足跡を調べるうえで役立つ資料を紹介します。

◆横浜商人のデータベース

横浜開港場の日本人町にはどのような商人たちが在住していたのでしょうか。『横浜市史』第2巻（横浜市、1959年）の巻末に収録されている「付表 横浜商人録」（以下、商人録）には、安政6年から慶応4（1868）年に至る在住商人の屋号、生国、前住地、苗字、拝借地、坪数、営業（拝借）年月日、営業品目、支配人、代理人などが記載されています。商人録の主な典拠は甲州屋忠右衛門が筆録した「横浜町拝借地所御願済渡世名前合写」（篠原家文書、山梨県立博物館蔵）であり、これに万延元年12月刊の石崎源六「黄金花」記載の諸色売込町商人、慶応2（1866）年の生糸・繭願済商人などを補った、横浜商人の調査を進めるうえで必読の記録といえます。

また、この商人録を見やすい一覧表の形式にまとめ直し、一部補足したものが菊地悠介「幕末維新期横浜売込商データベース」（横浜幕末維新史研究会編『幕末の開港都市・横浜』戎光祥出版、2024年）です。横浜商人は輸出を手掛ける売込商、輸入を手掛ける引取商とに区分することができますが、このデータベースでは茶売込商の情報などが追加されています。

斎藤多喜夫「開港時の横浜商人―御貿易場瓦版から―」（『横浜開港資料館紀要』20号、2002年）は十分に活用されてこなかった御貿易場瓦版を類型化し、安政6年6月時点での横浜商人の一覧を示しています。商人録に記載がなく、御貿易場瓦版のみに記載されている商人の一覧も掲載されています。

以上の横浜商人のデータベースをみれば、その出自や営業形態の多様性を見出すことができるでしょう。

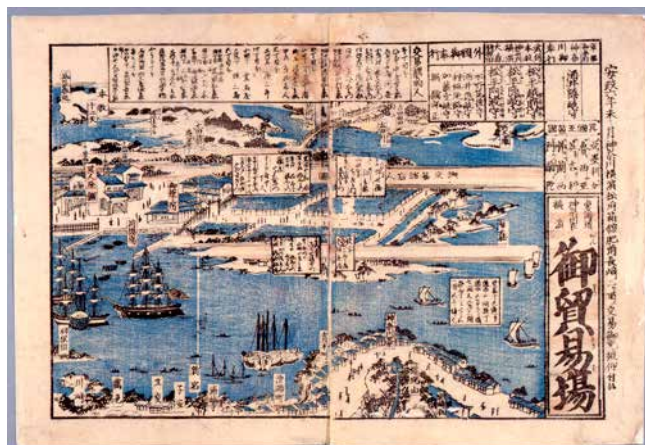
◆横浜商人たちの活躍

横浜商人の出店過程や営業実態については前掲『横浜市史』第2巻が「冒険投機商」（巨利を得ようと図る投機商）の甲州屋忠右衛門、「門閥豪商」（幕府の命で横浜に出店した門閥の豪商）の三井横浜店を取り上げて詳述しています。

甲州屋は甲斐国八代郡東油川村（現山梨県笛吹市）の長百姓篠原家出身の商人です。横浜開港場の本町2丁目（当時）に店を構え、外国向けに甲州産物一式・海草・生糸・茶などを販売しました。甲州屋の経歴については石井孝「初期横浜貿易商人の存在形態―甲州屋忠右衛門を中心として―」（『横浜市立大学紀要』85号、1958年）や同「解説―甲州屋忠右衛門がたどった途―」（同編『横浜売込商甲州屋文書』有隣堂、1984年）なども参考になります。

開港にともない江戸の大手三井越後屋も本町2丁目に出店します。開港当初、大商人の横浜出店が進んでいなかったため、貿易振興を図る幕府が呉服・両替商として実績を重ねてきた三井に横浜出店を要請したのです。三井は生糸取引に参入し、荷主と横浜売込商とを仲介しましたが、攘夷運動の高まりを受け、3年ほどで事業から撤退しました。

横浜での貿易において最も取引額の大きかった輸出品は生糸でしたが、『横浜市史』では生糸売込商の横浜住民として



【図1】「交易諸商人」(上段)を記した御貿易場瓦版
「東海道神奈川在横浜御貿易場」安政6(1859)年頃 当館蔵

の側面や生糸売込商体制について十分な考察がなされませんでした。西川武臣『幕末明治の国際市場と日本―生糸貿易と横浜―』（雄山閣出版、1997年）では、群馬出身の江戸の豪商中居屋重兵衛や川越藩の御用商人吉村屋幸兵衛など横浜に出店した商人を事例として、売込商が製糸家に対して原料となる繭の資金を前貸し、そこで生産されたすべての生糸を自身に出荷させる「生糸売込商体制」について、横浜周辺地域とのつながりを意識しながら考察しています。

代表的な横浜商人の活動を概観したいという方は横浜開港資料館編『横浜商人とその時代』（有隣新書、有隣堂、1994年）をご覧ください。第一世代の有力生糸売込商として原善三郎・茂木惣兵衛・吉田（吉村屋）幸兵衛、丸善の創始者で有力貿易商に属さなかった早矢仕有、生糸商の小野光景、茶売込商の大谷嘉兵衛、海産物売込商の渡辺福三郎たちを取り上げています。

『横浜市史』刊行以降、「冒険投機商」「門閥豪商」に止まらない、横浜商人たちの豊かな存在形態が明らかになってきました。横浜商人に関する先行研究をもっと知りたいという方には、吉崎雅規「幕末期横浜に関わる研究動向」（前掲『幕末の開港都市・横浜』）がおすすめです。

横浜商人に関する古文書は全国各地に残されています。新資料の発見によって横浜商人研究はさらに進展していくことでしょう。横浜商人のデータベースがより一層充実したものになるよう、横浜開港資料館では今後とも調査研究に取り組んでいきます。

(神谷 大介)



【図2】三井横浜店(左)を描いた五雲亭貞秀「神名川横浜新開港図」
万延元(1860)年 当館蔵



特別公開

小川雄一コレクション初公開 横浜の外国商社と舶来時計

会期： 令和7(2025)年9月13日(土)
～12月21日(日)

入館料：一般500円

小・中学生／横浜市内在住65歳以上
250円

開場：企画展示室



展示関連企画

○展示解説

展示担当者による展示解説を行います。
9月15日(月祝)、28日(日)、10月5日(日)、13日(月祝)、26日(日)、11月3日(月祝)、24日(月振)、12月6日(土)、20日(土)、21日(日)

時間：14時～ ※それぞれ30分程度
予約不要

会場：企画展示室入口

参加費：無料(ただし入館料が必要)

○展示担当者による連続講座

(1)9月27日(土)

「横浜外国人居留地の
外国商館」



(2)10月11日(土)

「商館時計の魅力と流通」



講師：白井拓朗(当館調査研究員)

会場：横浜市開港記念会館6号室

時間：14時～15時30分

参加費：各回1,000円 定員：各50名
(先着)

○まち歩き「横浜外国人居留地を歩く」

日時：10月25日(土) 13時30分～16時(予定)

集合：横浜開港資料館 講堂 解散地：
関内駅周辺

参加費：1,000円 定員：20名(先着)

申込締切：10月10日17時まで



※連続講座とまち歩きは、定員に達し次第募集終了となります。

○展覧会図録

横浜開港資料館編『小川雄一コレクション初公開 横浜の外国商社と舶来時計』
公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団発行

A4判、オールカラー44頁、1,300円(税込)

「たまくすの木」バリアフリーデッキ完成お披露目セレモニーを開催しました

クラウドファンディングにご支援いただいた方や返礼品協力企業さまをご招待し、7月10日(木)に「たまくすの木」バリアフリーデッキ完成お披露目セレモニーを開催いたしました。

セレモニーにあわせて、銘板・ご寄付いただいた新たなテラス席の設置もいたしました。憩いの場としてご活用ください。



寄贈寄託資料

- ・野崎家横浜中条支店関係資料 拓本「須野崎久治郎先生碑詩」3点(野崎一彦氏所蔵当館寄託)
- ・野崎家横浜中条支店関係資料396点(野崎一彦氏)
- ・野田秀三家資料(高谷道男氏旧蔵)442点(野田秀三氏)
- ・小倉英幸家資料19点(小倉英幸氏)
- ・金銀銅象嵌銅製花瓶一对・龍浮彫花盛器3点(歌川隆旧蔵)

横浜開港資料館 利用案内

開館時間 9:30～17:00(入館は16:00まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始ほか

入館料 一般200円 小・中学生／横浜市内在住65歳以上100円

*特別公開「小川雄一コレクション初公開 横浜の外国商社と舶来時計」会期中
一般500円 小・中学生／横浜市内在住65歳以上 250円

閲覧室の利用について

事前予約制(先着順)です。閲覧希望日前日(の開室時間中)までに、電話で予約してください。

開室時間 10:00～12:00 13:00～16:00

休室日 月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、資料整理日(毎月第4金曜日)、年末年始ほか

利用料 100円(閲覧室のみご利用の場合)

電話番号 045-201-2150(直通)

ミュージアムショップ & カフェ PORTER'S LODGE

営業時間 9:30～17:00(カフェラストオーダー16:30)

店休日 開港資料館に準じます

アクセス

- ・みなとみらい線「日本大通り」駅4番出口から徒歩2分
- ・JR関内駅(南口)、市営地下鉄関内駅から徒歩約15分
- ・JR桜木町駅から市営バス「日本大通り駅県庁前」下車、徒歩1分

ホームページ

<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

X(旧Twitter) @yoko_archives

Instagram @yokohama_kaikou



管理運営団体 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

*今後の状況により変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ・お電話でご確認ください。